

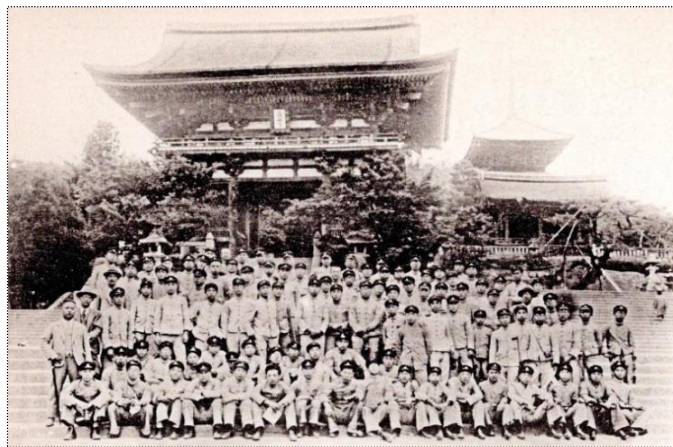


進修同窓会HPにアクセス

## 土浦中学校の修学旅行10 中学30回生の関西旅行4

1930〔昭和5〕年6月1日から8日に掛けて実施された土浦中学30回生の関西旅行。今号では、大阪・京都と巡った5日目の行程を『進修第32号』『関西旅行記』と『中三十回卒業五十周年記念誌』中30回松井喜一郎「旅行記余聞」とで迎っていきます。引用文中の旧字体は新字体に改めました。

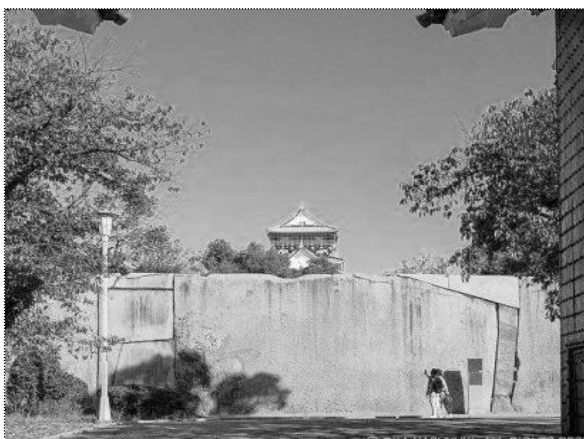
引用文中の【 】は筆者による注記です。



清水寺 中37回 1937〔昭和12〕年

第五日(6月5日)五年 太田惣一

六月五日、朝から雨が降つて、【大阪】築港見物は中止になつた。時間は何時もより後れて午前八時大阪の大日館を出発、市内電車に乗つて、大阪城に行く。朝雨に煙つた、大阪城は在りし日の盛んなる面影が、眼前に髣髴【ほうふつ】ありありと思ひ浮かぶさま【するの】を覚える。大手門より内に入れば、二の丸の多聞の楼が巍然【ぎぜん】高くそぼだつさま【とし】て聳え、その他これ等の楼が四十八もあると聞く、しばらくして振袖の形をした振袖石及び備前の池田忠雄侯が持つて来たと言ふ面積三十坪もある最も大なる蛸石が眼前を覆ふ。



大阪城蛸石

秀吉の偉大なる力、今更ながらに驚いた。数歩にして眼を転ずれば紀州の本丸を持つて来たと言ふ、紀州本丸は、近くは畏れ多くも明治天皇、今上天皇【きんじょうてんのう】当代の天皇。ここでは昭和天皇【の】の御座所として、遠くは、秀吉、彼を国王とせし、明の使者を切つたと言ふ【所に建つ陸軍第四】師団司令部の建物などを右に見て小さいな、樟【楠】木の

眼前にあるのに気が付く、豊臣の時代に、此処には、二百八十年余にもなる大きな樟木があつたが、兵火のために、焼かれてその跡に記念として建てたのである。成程根本には、大きな木の根の廻りが僅かに、雨に濡れてゐる。眼を上げれば深さ百二十尺もある、黄金水の屋根【ほろ】が見え、その向ふに十二時のドンを鳴した大砲がモーターサイレンに、其の任務を奪はれて、さびしく雨の中に燻つ【くすぶつ】てゐる。天守閣は今、修繕中【再建中】で大工のかなづちの音が反響して心地よく、カンクンと響く。この中には大阪市民が一日に三百五十万石も費すのに備へた、水道の浄化する所【ほろ】がある。曰く「東に秀吉、西にナポレオン。実に、豊臣秀吉は古今の偉大なる人物なり」と、実に然り。大阪城を出ず展望は相憎【生憎】にも、こうも雨傘のために遮へざられて、自由ならず、唯空濠の内濠と、青々と水を湛えてゐる外濠が、大阪の市内からかけ離れてゐる。大阪城の石は、二回の兵火のために黒く割目がついてゐる、鉄砲の打つ穴も見えた。大阪府庁を左に眺めて、やがて大阪の両国橋の感ある、天満橋にさしかゝれば手前には大阪一の天満の青物市場、遠くに三越の支店、大阪市庁がぼんやりと見える。しばらくして造幣局に着く、丁度二十円金貨【ほろ】を造つてゐた。厚い金の合金が薄く延ばされ、丸く打ち抜かれ、重量、大きさ形等は分業で、熟練職工によつて検査され、完全に出来るのである、二十万円、百万円などの袋が幾つも積み重なつてゐる、昔の小判が綺麗に陳列してあつた。こゝを出て、中ノ島公園に向ふ、天神橋の中段より、下に降りれば帝国在郷軍人が払ひ下げて貰つたと言ふ、東郷平八郎の書かれた義勇奉公の大文字のついた、旧軍艦最上前橋【しょう】帆柱【及び後艦橋を見上げる、向ふには音楽堂が見える、此処の広場は夏の浄土で、街頭絶好の納涼地点であり、ボートは川を

埋め、右岸に建て続いてゐる家々の灯影が如何にも好く夜景を整へて、男女の群は涼を追ふて、さまよふのであると、案内人弁をふるふ。天満橋より京阪電車に乗る、東京の電車と違つて中の設備がよく、整つて乗心地は非常に愉快だ。伏見【伏見桃山】下車、桃山の【明治天皇】御陵に向ふこの頃やうやく雨止んで雨雲が動き始めた。



乃木大将庭訓像(長谷川栄作氏作、東光寺蔵)  
左から父希次・母壽子・希典少年

雨で清められた道路をさくさくと進んで、一同襟を正し、皇運の長久を祈れば莊嚴はひたくと胸に、せまつて、頭は中々上げ得なかつた。畏れ多くも明治聖帝の英霊を納め奉つた霊境である、この地は昔桃山城本丸の在りし旧地で御宝壙【ほうこう】天子の墓【上は白砂を以て埋め奉つてゐる。次に照憲皇太后【明治天皇皇后】の伏見桃山の東陵に参拝し、乃木神社に行く、旅順【攻略】の際に捕獲した、機械水雷【二十七密】砲。火砲、砲弾などを見る、第三軍司令部たりし旅順柳樹の民家に心を持たれ、乃木將軍少年時代の庭訓【ていきん】家庭教育【を】を表はした像や米を搗きながら、勉強したと言ふ足踏白【ダイガラ】【等】に感

激して一時五十分伏見発、京都七条着、二時、三十三間堂に着く、その宏大なる建築物に驚いた、然し奈良を見た後の僕にとつてはさほど強く感じなかつた。後白河天皇が建立なされたと言ふ、通矢

【通し矢】<sup>(注6)</sup>の額も掛けてあつた。内に入れば、一千一体の千手観音像が安置されてあり、その他運慶の作、風神、雷神、及び婆藪仙人<sup>(注7)</sup>の如きものに至つては佳作絶好なりこれ等は皆国宝である、こゝを出て、博物館の前を通り、豊国神社に参拝す、【神社に隣接する方丈寺で】豊臣氏滅亡の原因となつた、国家安康の大鐘は、我ら数人の体で鳴すゴーンと言ふ音でさびしく豊臣の霊を弔ふ、忽ちにして五銭白銅<sup>(注8)</sup>がま口より消え失せる、旧式なる薄暗い家の並んだ陰気な町を通り抜けて、清水寺へ行く、五重の塔三重の塔が木の中に、姿を現はす、紅葉は

金山を包んで秋の風情を思はせる、京都市は一望の中に見られ低い家が暗く燻ぶつてゐる、所々百貨店の建物が抜き出てゐる、小鳥がキキと鳴いて谷へ落ちた。ふと下を見ると、三人の行者が滝の水を浴びて、一心に祈願を込めてゐる、何を

見ても古めかしい趣きは大阪から来た自分にとつて少しく倦怠を感じしめた祇園で名高い八坂神社に参拝した。

京都唯一の円山公園に入る、緑樹芳草四時<sup>(注1)</sup>し、春・夏・秋・冬、四季の眺望に適す。有名な枝垂桜は中央の小丘に有千年の年月を経て、高さ三丈余【一丈は約3尺】、その枝葉は四方に垂れて花開けば所謂雲霞か又瓔珞<sup>(注2)</sup>ようらく、仏像の天蓋<sup>(注3)</sup>の空に懸るが如しと、残念ながら今は初夏唯緑葉のみ茂つて、その面影を見るのが出来なかつた、浄土宗の総本山知恩院その荘大なる伽藍は、千余万斤の巨鐘と共に、静かに眠つてゐる。

思ふに川の都会、橋の都会である繁華な大阪と山の都会で時代に後れてゐるが何となく、奥ゆかしい、感のある京都

こゝに自然と二者の相違はあるが、然しどちらにも上方の悠長な気分が漲つてゐるのを感じずにはをられない。

その証拠ほどの神社仏閣へ行つても参拝人や山伏姿の人で一ぱいである。閑東そして東京などでは見られない光景である。重い足を引きずつて三条通りの伏見屋に着いた。時は午後五時頃であつた。

松井は、太田のこの記事を「旅行記余聞」で、

「……。続いて第五日、商都大阪の記録は経済に明るい太田惣一君。天満の青物市場や三越支店を遠望してから造幣局を訪れるのであるが、二十円金貨<sup>(注4)</sup>が出来上がるまでの刻明の記述は見事である。やがて豊国神社を参拝するのが、ここでは『国家安康』の銅鐘とおさい銭の五銭白銅を対比させる構成の妙。頭脳明晰の太田君らしい筆致である。……。」

と、評していますが、松井も大阪造幣局の二十円金貨には眼を奪われたやうで、その衝撃を次のように記しています。

「……。第五日は大阪市内見学、昨晩遊び過ぎて、目がしよぼしよぼしていたのが、大阪造幣局見学でたちまち目が覚めた。二十円金貨の製造過程を二階から見下すのである。厚い金の延棒が薄く延ばされ、丸く打ち抜かれて金ピカの金貨となり、袋づめにされるのだが、袋をみると二十万円、百万円などという気の遠くなるような数字が示してある。目が覚めるわけである。当時二十円金貨などは到底われわれの手に入るものでなく、金持ちが縁をつけて時計の飾りにぶらさげているほどの貴重品であつた。何しろ今回の八日間に亘る修学旅行の小遣いとして、小生が家から貰つてきたのが、金十円。別に制服の上着に十円札が縫い込まれていたが、これは非常用で使用不能だ。こういう状態の時の二十円金貨の山であるから、この時のショックは五十

年たった今日でも、つい昨日のこのやうに忘れられない。」

金貨の山はいつも見られたわけではなく、土浦中学修学旅行では銅貨の場合が多く、中30回生は幸運にも眼福を得たやうです。

更に中30回生は、夜の京都で二十円金貨以上にまばゆい京美人にもお目に掛かりました。松井はその幸運を次のやうに記しています。

「……。一方、京の夜のそぞろ歩きを楽しんだあとは、例によつて土産物あさり。ここでは奈良と違つてソフトムードの京人形。それもなぜか三条大橋そばの『元禄屋』に集中した。まともに拝めば目が潰れそうな美人の女店員が甘い京言葉でくすぐつてくれたせいだろうか。手の早い河野君などは、その京美人をカメラに収めて、してやったりである。ニキビだらけの一行の枕もとには、旅の荷物と一緒に人形の包みが大事さうに安置してある。……。」

目も潰れそうな京美人では、彼らが舞い上がり、土産物を買わされてしまうのも分かる気がします。しかし、美人に目を奪われていた生徒だけではなく、またまた喧嘩騒ぎを起こした者もいたやうです。松井は、

「……。この日の泊まりは京都で、宿はご存知伏見屋。京都三条通りにある土中の指定旅館である。ここでは、いろんなことがあつた。桃色がかつた、記事にできない事件もあつた。

この夜、三条河原に散歩に行った長谷川正太郎君が、早稲田実業の三人組にやられて帰つてきた。それつというので、神林、久保谷茂、河野、宇佐見君ら七人がドスを片手に仇討ちに駆け込んで行く。相手の三人は当方の氣勢に押されて平あやまり。終わりにには共同便所の中で土下座してあやまつたのでこの場はおさまつた。……。」

とも記しています。奈良で秘かに手に入れたドスの使用機会が早速巡つてきたやうですが、斬つた張つたの大喧嘩にならずに済んだのは幸いでした。

<sup>(注1)</sup>黄金水の屋根  
金明水井戸屋形。小天守台上にあり、<sup>(注2)</sup>昭和44年の解体修理の際に、天守と同じ<sup>(注3)</sup>寛永3年に建てられたことが判明した。豊臣秀吉が水を清めるために井戸に黄金を沈めたという伝承から、金明水の名が付けられている。徳川家の時代には、「黄金水」と呼ばれていた。徳川大坂城が落雷で焼失する中、この井戸だけは残った。重要文化財。

<sup>(注2)</sup>水道の浄化する所  
<sup>(注3)</sup>「明治28」年、天守台の東側に大手前配水場が建設され、地中に配水池が設置された。

<sup>(注4)</sup>二十円金貨 五銭白銅  
一円は100銭、米価と比較すると、当時の一円は現代の約2000円に当たる。

<sup>(注5)</sup>機械水雷  
略称は「機雷」。水中武器の一種で、金属製の円筒または球形の容器に爆薬や起爆装置などを入れ、海中に敷設し、航行してくる艦船が接触または接近して感応したときに爆発し、その艦船に損傷を与える兵器。

<sup>(注6)</sup>足踏(ダイガラ)  
白の一種。てこを応用して杵の柄の一端を足で踏み、白の中の穀物などを搗くもの。  
大唐白(ダイガラウス)。

<sup>(注7)</sup>通し矢  
平安末期、京都の三十三間堂で始められた弓術。三十三間堂裏側広縁の南端から北端までの66間(約120メートル)を射通すもの。室町末期から盛んになり、江戸時代に記録更新の矢数(やかず)競技となつた。

<sup>(注8)</sup>婆藪仙人  
婆藪仙(ばすせん)、ばそせん、ばすうせん、ばそうせん)とは、仏教における護法善神。三十三間堂では二十八部衆の一尊とされ、吉祥天とともに千手観音の脇侍(わきじ)とされる。